

龍巻に見舞はるる北票
 熱河省の北票は朝陽に通ずる一都邑であるが、酷暑の候は蒙古名物の熱風と眩惑せんばかりの日光の爲め、酷熱の候と通りでない。熱風のみならずこの地方の常として暴風雨は一日だ熱風が襲来すると同時に、天地は晦冥として恐るべき一瞬大龍巻に見舞はるるのである。寫眞は炎天下の北票の市街である。

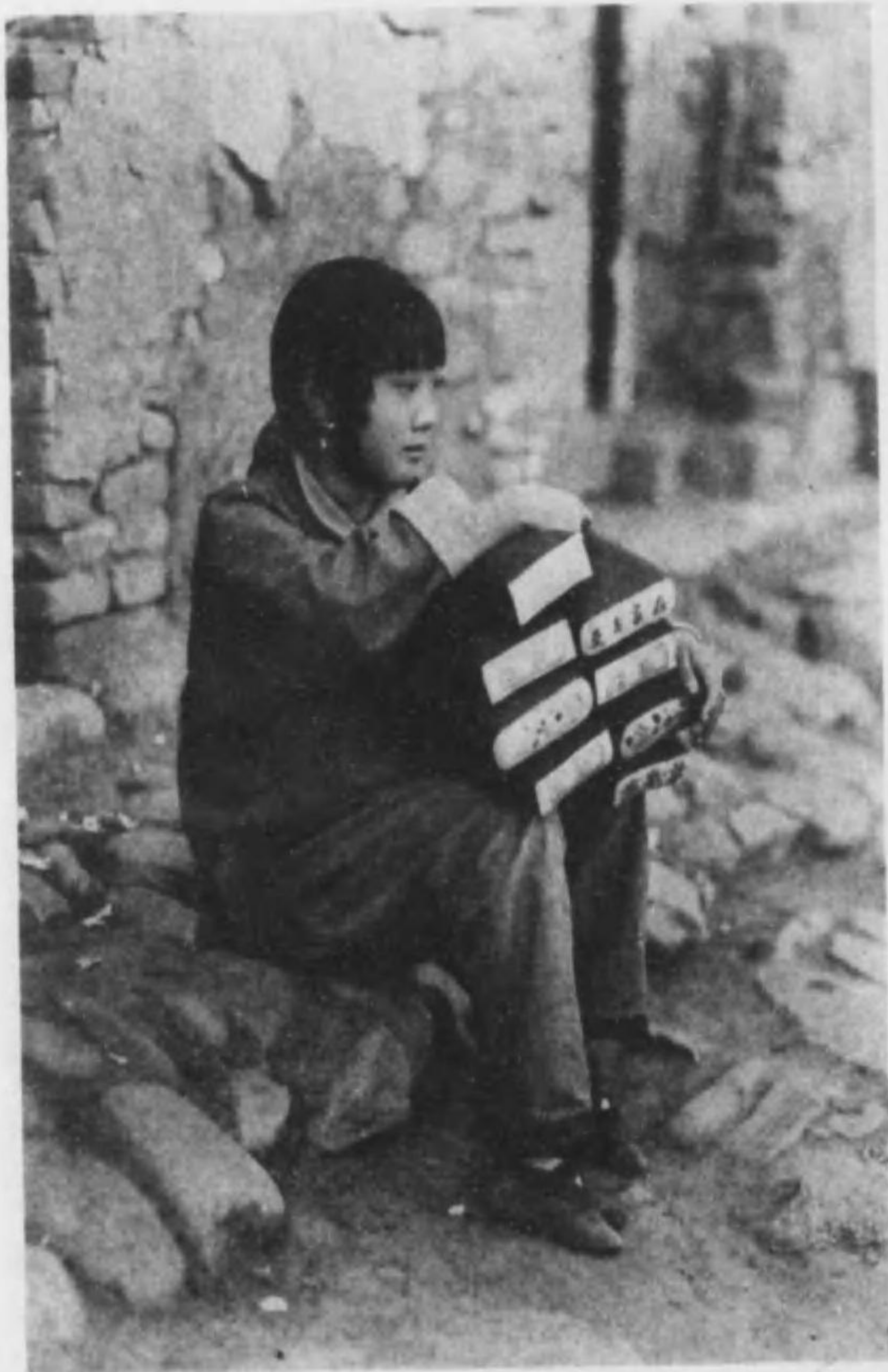


朝陽の市街

三座塔の名を以て知られてゐる朝陽は古くから熱河省の主要縣城の所要地であるが、その市街は東蒙の故地といふだけで餘りに振はず、烈日の炎天下に照りつけられ、黄塵に塗れながら古ぼけた門は昔のまゝに立つてゐる。寫眞は朝陽市街の門である。

小娘の枕賣り

熱河街道のさゝやかなる宿場、石匠を過ぐる旅人は、必ず愛らしき小娘美しき刺繍の施された枕を買ふべく勧められる。そうして是等の小娘は旅人と見れば積極的に細びを呈して枕を賣り付ける事に力めるのである。旅情を慰む道中の一挿話として或は興味がないでもなからう。寫眞は枕を賣る小娘である。



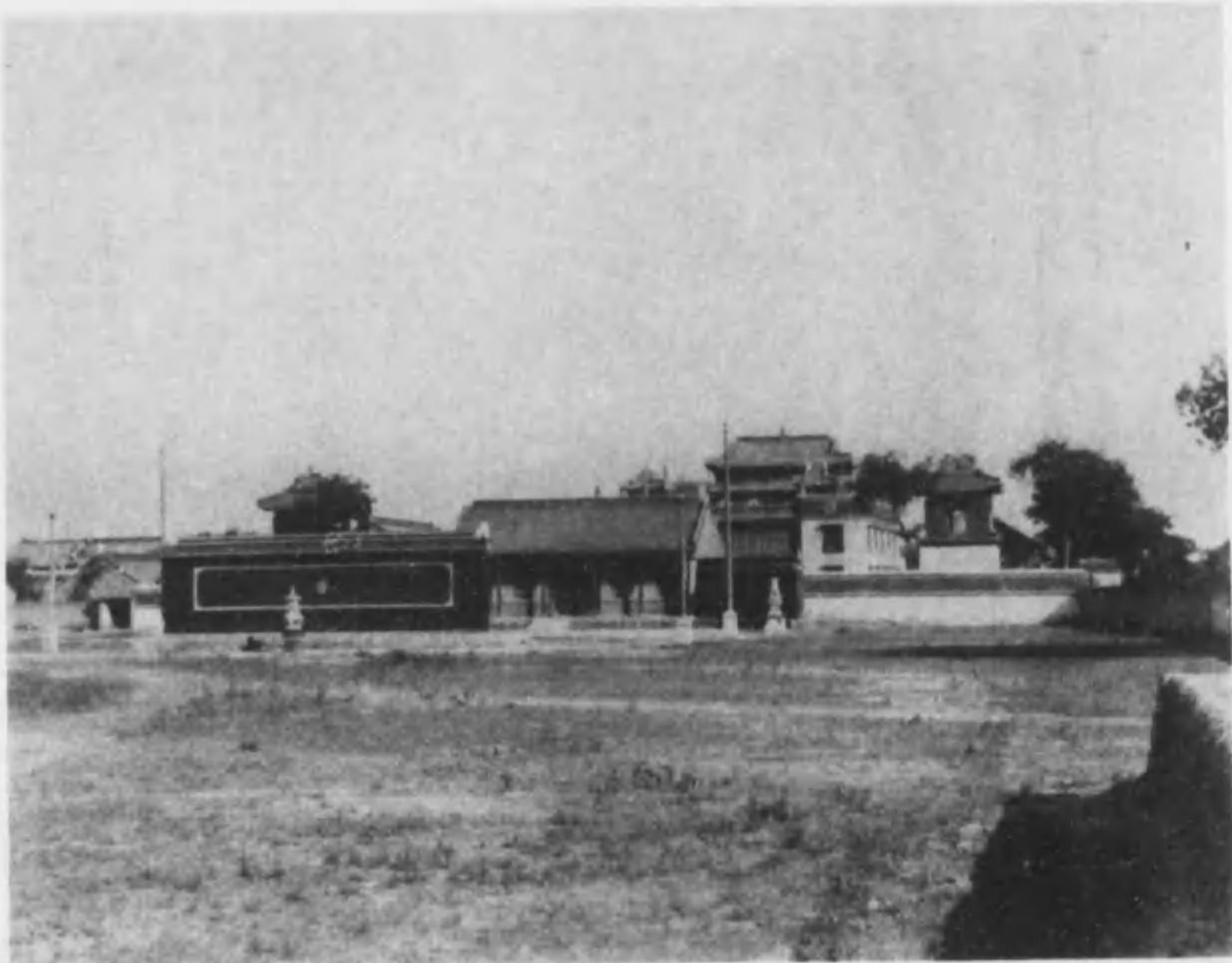
正月二日の拜神

満洲に於ける慣習として一年を通じて諸種の儀禮、式祭が行はるゝが、正月には財神を祭る禮がある、それは二日に神を拜むのである。勿論元日に諸神を迎へた際に一寸財神を拜するのであるが、正式には二日に行れる、其神様といふのは寶の神で、即ち財神である、此神は甕の神に次で廣く祭られる。此財神を祭るには、先づ神壇の酒杯三箇に焼酒を注ぎ、それに點火し、更に線香を燃して捧げ、酒杯の火も、線香の火も、其焰が大きくなるのを縁起として喜ぶのである。



清時代建築の後廟

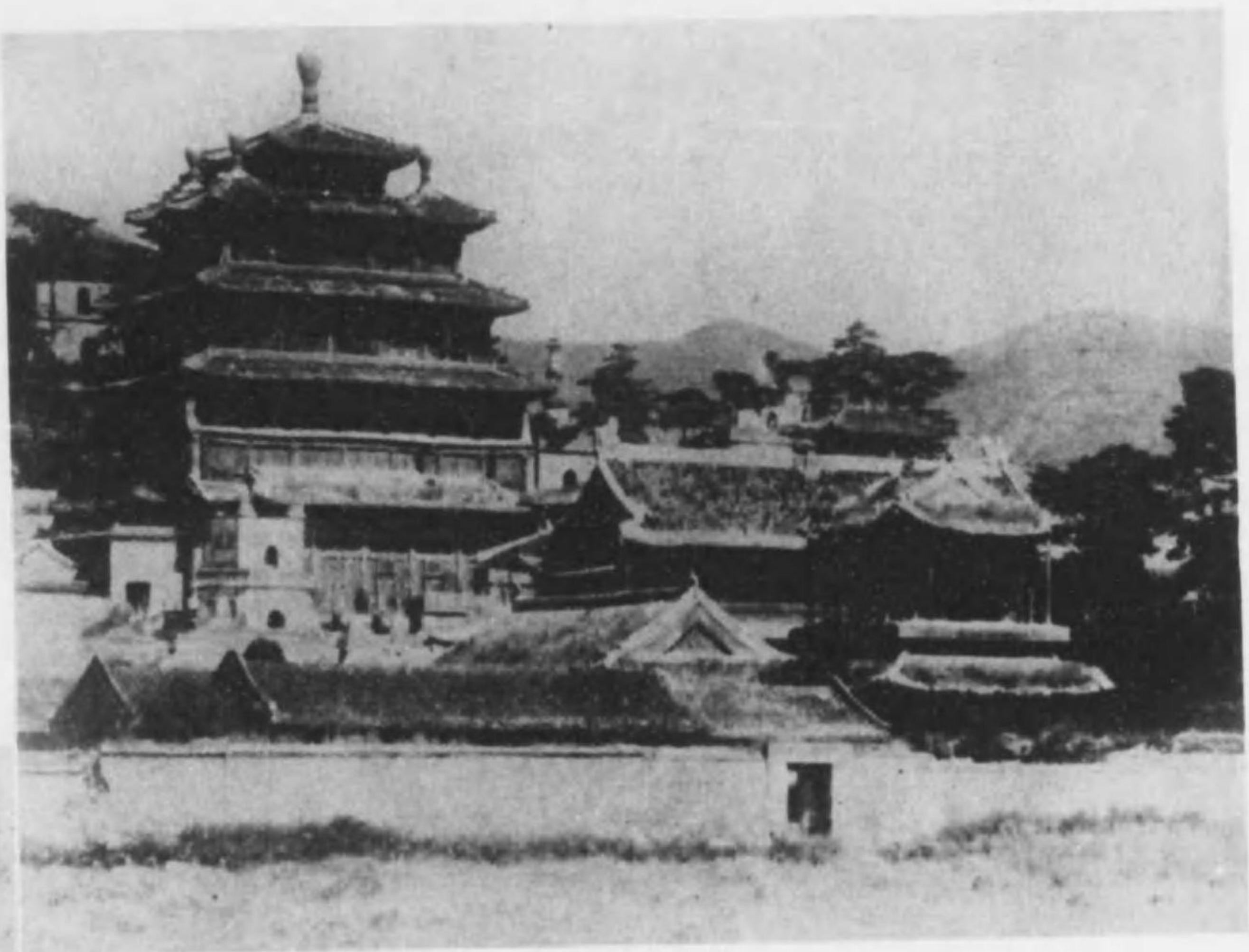
その前廟、後廟はともに葛根、所謂活佛の管轄する寺廟である、寫眞を有して居る。此の時代即ち嘉慶年間、此の後廟は隆祐寺といふ勅賜寺號を有して居る。後廟は、後佛爺と呼ばれ、その權柄は人民の統治權と贈られたものといふものである。



通遼附近の莫林廟

四洮鐵道の支線たる鄭通線の終點驛の通遼は舊名を白音太來（バインタライ）と呼ぶ、此白音太來の西方六十支里の所に莫林廟がある。莫林廟は喇嘛廟で、草里克圖親王の家廟で、活佛を始め、僧侶六七十人に連なる大規模なものである。當寺は清の順治年間、喇嘛僧に係り其建築は主として西藏式を用いてある。尙當寺は勅賜寺號を蒙り、祭典は陰曆四月十八日と七月十五日の兩度で甚だ盛況である。





熱河の大佛寺（上圖）

清朝の雍正帝が熱河に熱河廳を設置した以來、帝は熱河に西藏風の喇嘛廟を造營して數千の喇嘛僧を安住せしめたので、熱河は喇嘛教の隆盛地として知られ、宏壯盛觀なる喇嘛寺が少なからず存在して居る、寫眞に示す大佛寺も其の中のものである。

林西の西門（下圖）

林西は熱河省の一都會である。林西縣が創めて開放されたのは清朝の光緒三十三年で、巴林王が察罕木倫河の西北の地五萬一千六百町歩を劃して設置した一城王鎮の地が即ちそれである。林西の人口は一萬弱を有す。縣城には城壁を繞らし東蒙古に於ける重要な貿易市場として隆昌を示して居る。寫眞は林西縣の西門である。

元來林西は穀類、藥草、畜産等の地方物資の集散地であつて、西路は經棚多倫を経て張家口に至り南路は烏丹城、赤峰、朝陽を経て錦州に通ずるので自然東北兩路よりする蒙古産物及び西南兩路より來る轉移入品は總て林西を集散地としなければならぬ地位にあるから、將來は益々隆盛を期待されて居る。





山頂の二郎廟

山海關附近の山岳、翠帶の連なる附近は、風光優れ、景観に富んでゐる、殊にその山趣の相似たるより之を長江三峽の景勝に比して別名を小蜀峽と呼ばれてゐる。

その首山の頂上に建つてゐるのが二郎廟である。當廟の堂宇の傍には老櫻二三株と一株の老松がある。かの蜀峽で名高い白帝城懐古の「巖懸青壁斷、地險碧流通」の詩句を想はるのである。

寫眞は頂上に建てる二郎廟の光景である。

二郎廟附近の風光

二郎廟は山海關附近の一勝地として其名ある所である。この附近の山勢は曲折した溪水の流れが山峽を繞つて雄壯な山貌に一層の美趣を彩つて居る。

嘗ては第二奉直戰の演ぜられたる當時、此地はその激戰地として、腥風に吹き荒らされた事は、今尙民國の歴史として新しい記憶である。

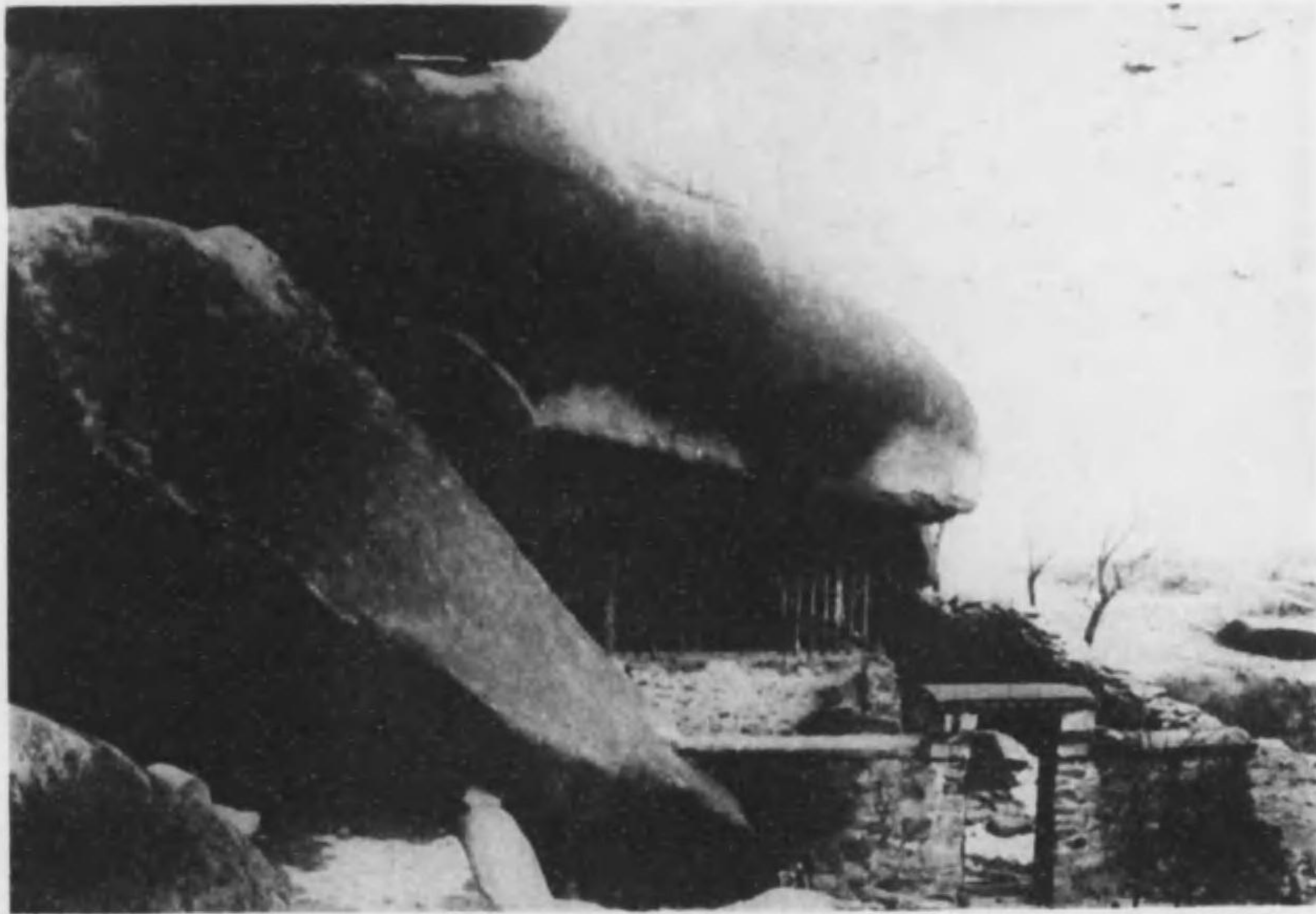
この山中を繞り流るゝ溪河の水は清冽であつて底の石も數へ得るほどで此河の鮎は名物として知られてゐる。

寫眞は山海關二郎廟附近の山勢である。



玄陽洞附近の岩窟

山海關の玄陽洞附近には、天然の景致を利し、自然の趣に少しの加工を施して興味を深からしめたものがある。それは一大岩石の空隙を巧みに利用して普通の岩窟とは全く趣きを異にした住居を築んで居るのである。この物好きは全へく好きであらう。であるが、亦是れ一種の技工的興趣と言ふべきであらう。此の岩窟は過ぎし年の水直戦の際多量の影を掛けて一大岩石の岩窟は過ぎし年の水直戦の際全く空虚荒廢に歸し僅に其残骸を留めるのみである。今は



展望に富む角山寺

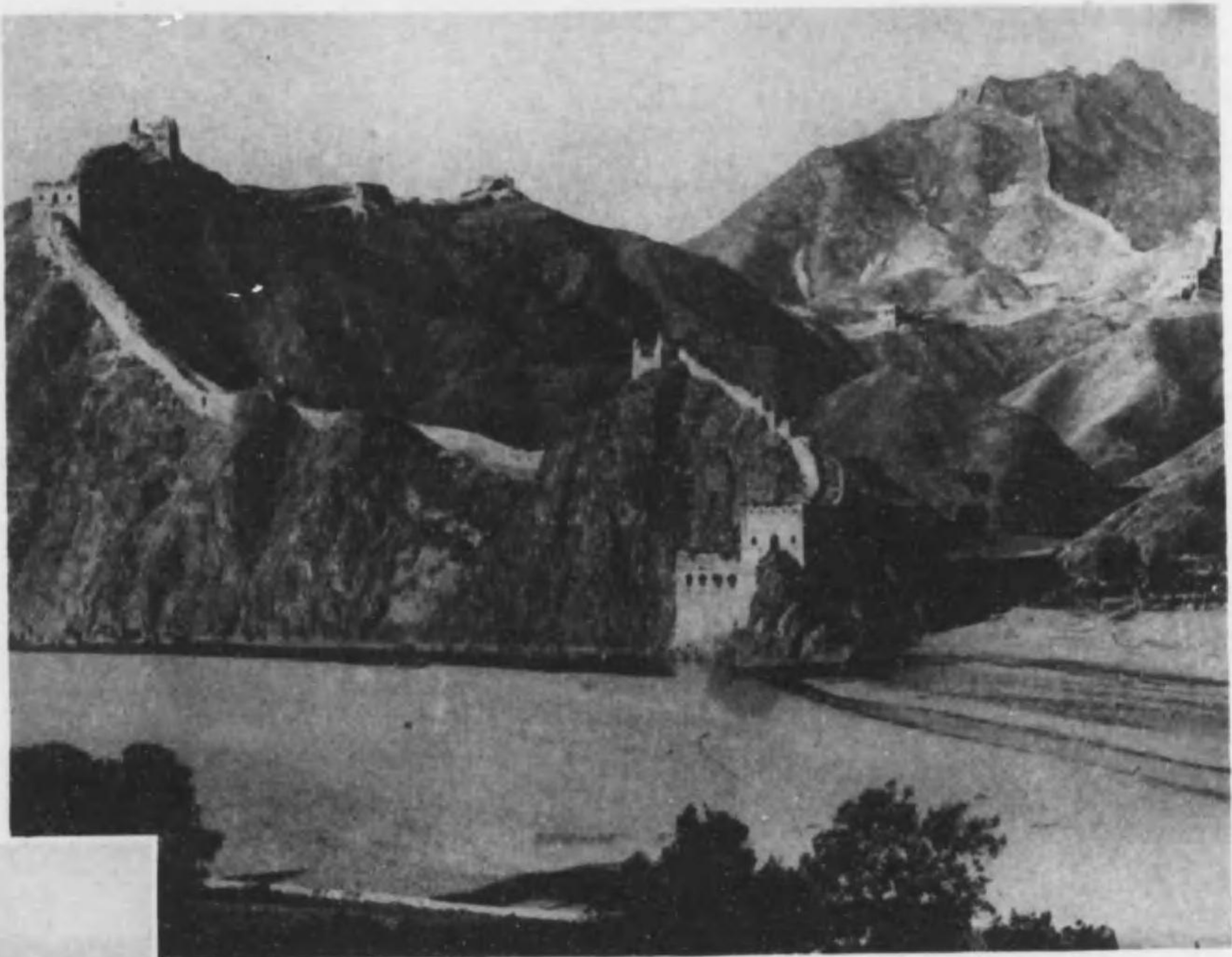
山海關上の角山は由來展望の勝地として知られて居ると共に、其處に建立されてある角山寺は最も展望に富んでゐる。試みに山巔に立ちて展望の眼を放たんか、濛々たる渤海の碧浪は遠く天涯に連りて塞に水天彷彿の觀がある。寫眞は山海關角山寺附近の光景である。

山海關を守る支那兵

外製防備の要衝たる山海關には、常に技を守る兵士が置かれてある。

一見ノッキの如くに見ゆる支那兵も、其場所に於ける、其の職掌に於ける任務は頗る重大である事を自覺しなければならぬ。寫眞は支那兵が直立不動の姿勢を執つて山海關を守り居る光景である。





古北口附近の萬里の長城（其一）

熱河省と河北省とを境典とする萬里の長城は、所により種々なる致趣景觀を異にして居る。時には些かなる農家を抱くを見、時には河水に其裾を濡らすを見る。

山骨稜々たる連脈に沿ふて走る萬里の長城の景趣は歴史的懷古を伴ふて悽愴の感に打たる、一面に於て、又傳奇的な興味を喚ぶ場合なしとせぬのである。

寫眞に見る景趣は古北口を壓する萬里の長城であつて此附近は河北省に屬するのである。

古北口附近の萬里の長城（其二）

萬里の長城を背景とする古北口の山態は概して陰慘悽愴の氣に充たされて居る。自然の天險に、奮闘の人力を加工して出来上つた長城の偉觀雄貌は、まことに漢民族の絶大の力であると共に、此力を以て北方の民族を積極的に威壓したものと見られる。

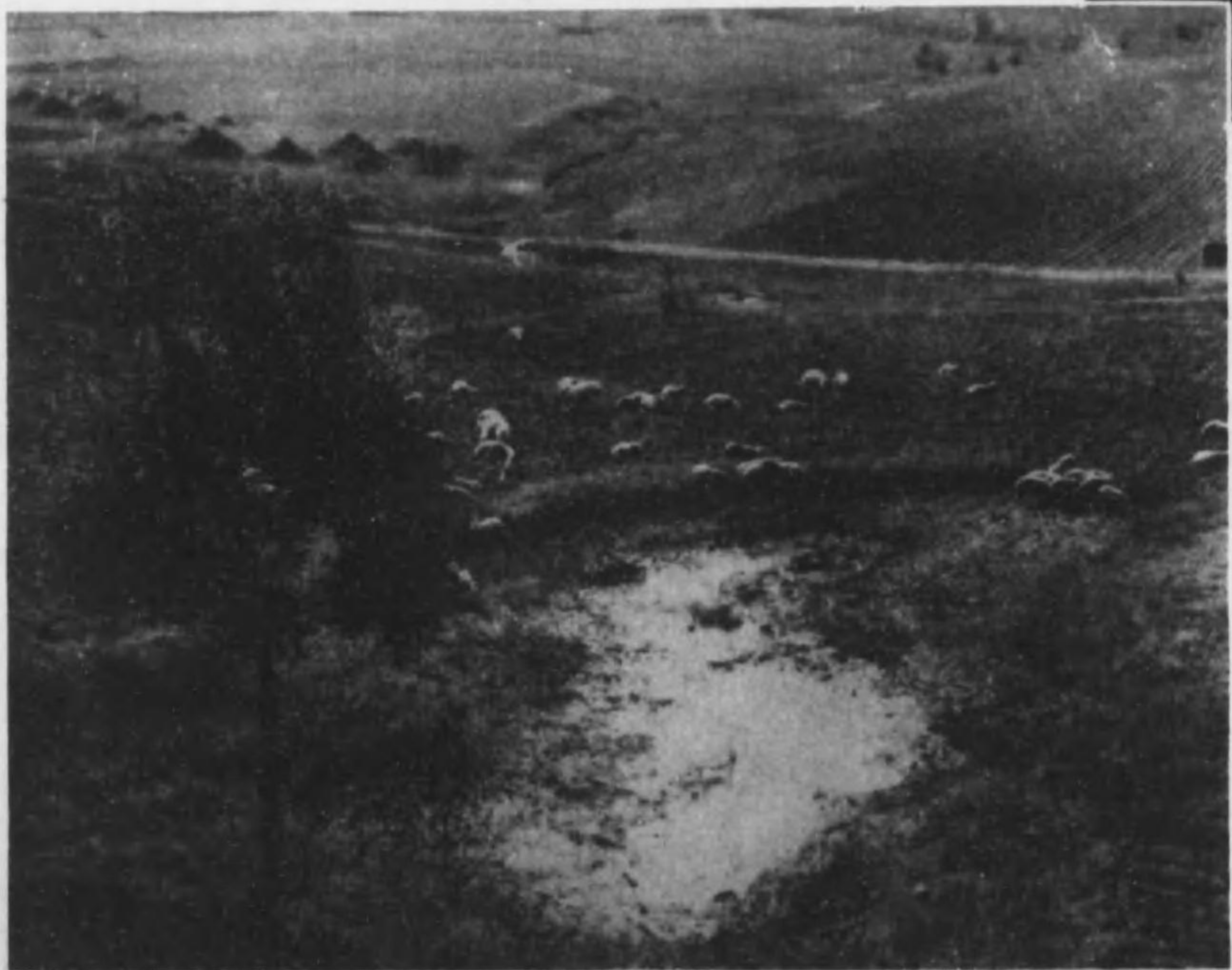
寫眞は別掲の古北口附近の景觀であつて、同じ山嶽脈帯を繞る長城の景致が轉々として興趣を示し來るところに盡きざる興味を覺ゆるのである。





山海關城外の群羊

萬里の長城を中心として幾百千年の昔から兵馬の歴史に多大の關係を有して居る山海關は、國防の要地として常に守備警戒に怠りなく多大の注意を拂はれて居るのであるが、是れに引き換へて一步城外には和かな風に吹かれて無心の羊群が氣持よく放牧されて居る光景に接しては、流石に危大なる支那の悠々たる片面あるを想はるゝのである。

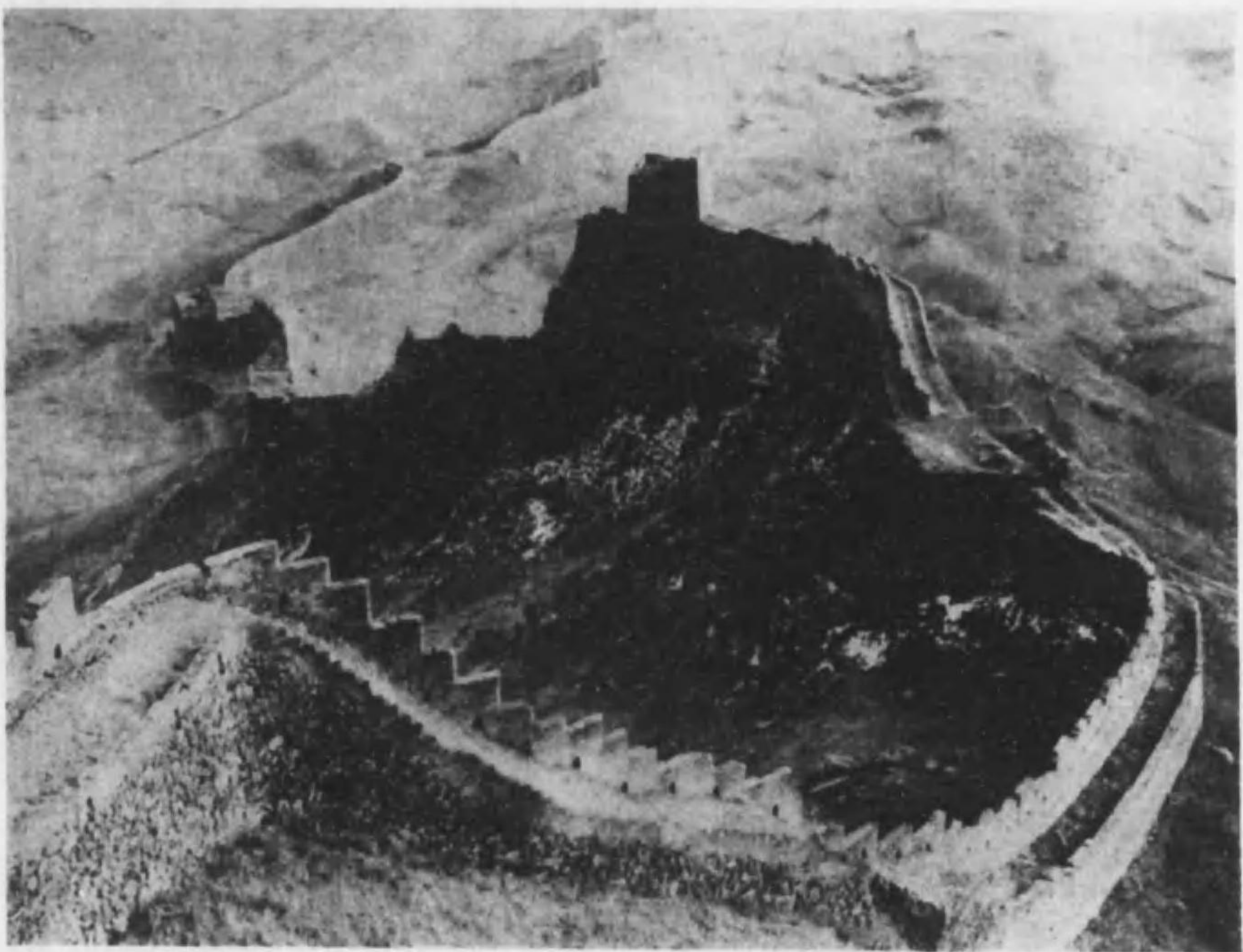


山海關棲賢寺前庭

山海關は南方渤海に瀕し、一方山を負ひ、萬里の長城の終點地として、寔に「天下第一關」と題されたる關門的要地である。此の山海關に所在する棲賢寺は、前庭渤海の雄大なる展望を擅まゝにし、景觀絶勝、殊に其の山上よりさし昇る日出の壯觀は眞に天下雙絶と言はれて居る。

古來南畫として賞せらるゝ支那風景味の一面に於て、又我が大和繪の風致を多量に加味したるが如き致趣がある。

寫眞は山海關棲賢寺前庭の眺望である。



萬里の長城

甘肅省の臨洮から河北省の山海關に至る延長七百餘里と言はれて居る、所謂萬里の長城は、今を距る二千三百年、秦の始皇が一世の偉業を物語るものである。

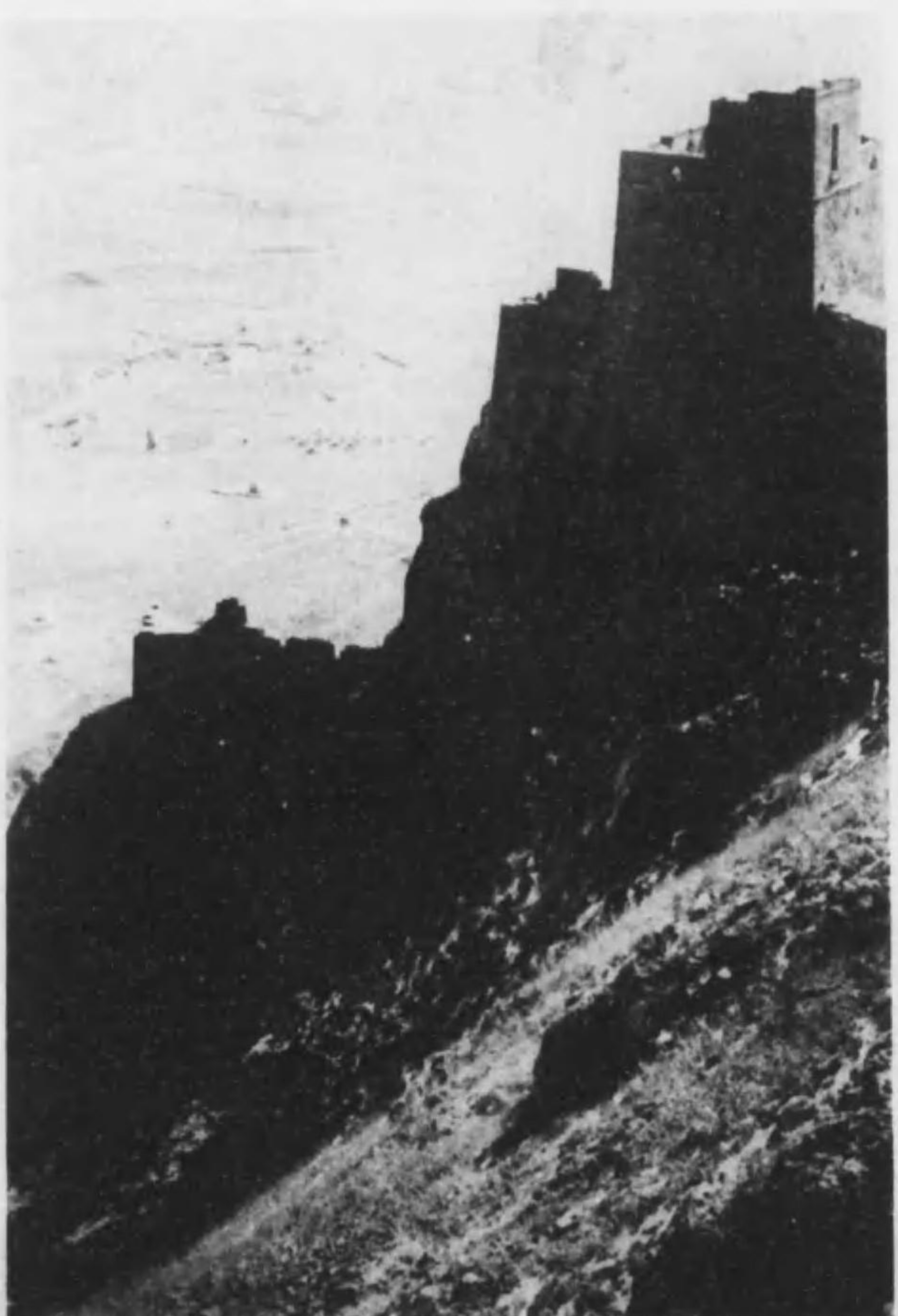
此の工事にたづさはる工夫で不幸にして死する者は、之を壘下に埋めて人柱を築いたといふ傳説は、一種の興味を以て聽かれるのであるが、斯る口碑的傳説は兎角として、尨大なる支那を代表するかの如き一名物、否、支那が世界に誇る或は一つの大名物であらう。

其の長城の盡くる所の地點、山海關は所謂これ天下第一關の稱ある一關門で、此の萬里の長城を以て蒙古の一部、即ち現今の熱河省の境となつて居るのである。

寫眞は萬里の長城に沿ふ山海關の雄偉なる景觀である。

長城の狼煙臺

萬里の長城には所々に、敵の襲來に備へる爲めの狼煙臺なるものが設けられてある。其の臺上から遙か彼方の信號を認め、スリこそ敵の襲來と警戒を怠らなかつたと云ふ守城ぶりを、今にして之を顧想するも、亦是れ一つの歴史的興味である。寫眞は狼煙臺の光景で、上方伸びて居る地は關内で即ち山海關に面して居るのである。



昭和九年一月六日印刷
昭和九年一月十二日發行

滿蒙地理風俗寫真大觀 奥附

定價 金貳拾圓

編輯兼
發行人 山 田 米 吉

印刷所 日本圖書刊行會印刷部

不許
複製
轉載

東京市神田區猿樂町二丁目十三番地

發行所 日本圖書刊行會

電話 神田一三一九番
振替 東京三八〇七〇番

430

~~23~~

F292.25

MAY

終